

若獅子、 氷上を駆ける

2007年に同好会の結成からスタートし、

いまや近畿・北信越・東海地区において優勝候補筆頭といわれるまでに成長を遂げた光泉カトリック高校アイスホッケー部。

「獅子奮迅」のスローガンの下、今日もリンクを自在に駆け回る。

ジュニアの受け皿を目指し 未経験からスタート

12月初旬、滋賀県立アイスアリーナを訪ねた。練習開始時刻の19時30分、辺りはすでに真っ暗だ。静けさに包まれたアリーナのゲートをくぐり、光泉カトリック高等学校アイスホッケー部監督 山田幸伸監督

すると、リンクでは試合ながらの激しい攻防が始まっていた。ステッキがぶつかる乾いた音に加え、時折、ブレーヤー同士の激しい衝突音も響く。「相手に体ごとぶつかり、パックを奪います。ラグビーと似たような競技ですよ」と、山田幸伸監督が教えてくれた。

光泉カトリック高校アイスホッケー部の始まりは、2007年にさかのぼる。当時、すでに滋賀県立アイスアリーナを拠点とする滋賀ジュニアアイスホッケークラブが存在していたが、ジュニア世代が進学後も競

技を続けられる環境は県内になかった。そこで、アリーナと日本アイスホッケー連盟は光泉カトリック高校に打診し、同好会の設立が決定する。

バスケットボール部を指導していた山田監督に、白羽の矢が立つた。「これまで弱りましたよ。スケートの経験すらありませんでしたから、靴の履き方から覚えました。当時、40歳ですよ」と苦笑する。

校内で呼びかけると生徒10人が集まり、アリーナでジュニアを指導していた石塚史人コーチ（当時大学生）も加わった。北海道出身の石塚コーチは、中学・高校ともに全国大会準優勝を経験している。陸上トレーニングを山田監督を受け持ち、二人三脚の指導が始まった。当時、40歳ですよ」と、山田監督は選手育成の難しさを話す。

アイスホッケーは、重さ8～10キロほどのプロテクターを身に着ける。限られた視界で氷上を動き、時には全速で走行中に反転し、後ろ向きに滑る。こうした基本動作を習得したうえで、初めて技術や戦術の話ができる。他の競技と大きく異なるのは、リンク内でブレーヤー5人とゴールデンダー（キーパー）1人が競技する中、自由に交代できるという点だ。1チームあたり、最大22人（ブレイヤー20人、ゴールデンダー2人）まで出場ができる。

同好会の設立当初は、県外の強豪相手にまつたく歯が立たなかつた。光

泉カトリック高校が属する北信越・東海・近畿ブロックの中でも、強豪は長野県勢だ。20対0で敗北を喫した試合もあった。

「攻めることなく、ひたすら守り続けていました」と石塚コーチは振り返る。

ところが翌年、同好会から部に昇格すると、全

屈辱を乗り越えて 全国レベルの強豪へ

「陸上競技なら誰でもすぐに始められます。アイスホッケーはリンクを滑れなくてはなりません。未経験者が競技の動きができるようになるまで、1年半から2年かかるのです」と、山田監督は選手育成の難しさを話す。

国高等学校アイスホッケー競技選手権大会（インターハイ）のブロック予選で3位となり、全国への切符を手にした。まさかの出来事に、校内は沸き立つたという。

中等部から入部した選手が増えるにつれ、部は次第に実力をつけていった。2013年には、国民体育大会の少年の部において予選を突破し、本大会4位という好成績を収める。

以降、ブロック予選で度々優勝し、本大会でも上位に食い込む強豪へと成長していった。

ところが、今年は新型コロナウィルスが大きく影響している。強豪ひしめく東北・北海道勢であれば練習試合の相手に困ることはないが、光泉カトリック高校は滋賀県内に相手がない。越県を控えている現状で試合勘を養うのは難しい。

そんな状況下にあっても、11月初旬に開催されたインターハイのブロ

ック予選で優勝し、長野県で1月21日から開催される全国大会への出場を決めた。次は12月19～20日にかけ

ての国体ブロック予選だが、本誌の発行日（12月25日）にはすでに結果

が出ているだろう。主将の茶木悠生

（フィジカル・身体的）トレーニング

を動くことができます。全国で勝つためには、それができる体力と、状況を判断する力が必要です」と石塚

コーチは話す。こうした体力面・技術面の礎となるのが、山田監督が重んじる「あいさつ」「物を大切にする心」「仲間の意識を持つ」といつ

た生活習慣から養われる人間力だ。

かつて野球部を甲子園レベルまで育て、バスケットボール部を全国バス

ト8に導いた名将の指導方針は、今も変わらない。

1月、全国の舞台で氷上を駆け回



光泉カトリック高等学校
アイスホッケー部

石塚史人コーチ



実戦を想定した4対5のメニューで窮屈に備える。選手は次々と入れ替わるため、状況の判断力が問われるスポーツだ



白熱したゴール前の攻防。シュートで放たれたバックは、トップレベルの選手なら時速140キロまで達するという



光泉カトリック高等学校
アイスホッケー部
山田幸伸監督



白熱したゴール前の攻防。シュートで放たれたバックは、トップレベルの選手なら時速140キロまで達するという

校内で呼びかけると生徒10人が集まり、アリーナでジュニアを指導していた石塚史人コーチ（当時大学生）も加わった。北海道出身の石塚コーチは、中学・高校ともに全国大会準優勝を経験している。陸上トレーニングを山田監督を受け持ち、二人三脚の指導が始まった。当時、40歳ですよ」と、山田監督は選手育成の難しさを話す。

アイスホッケーは、重さ8～10キロほどでのプロテクターを身に着ける。限られた視界で氷上を動き、時には全速で走行中に反転し、後ろ向きに滑る。こうした基本動作を習得したうえで、初めて技術や戦術の話ができる。他の競技と大きく異なるのは、リンク内でブレーヤー5人とゴールデンダー（キーパー）1人が競技する中、自由に交代できるという点だ。1チームあたり、最大22人（ブレイヤー20人、ゴールデンダー2人）まで出場ができる。

同好会の設立当初は、県外の強豪相手にまつたく歯が立たなかつた。光

泉カトリック高校が属する北信越・東海・近畿ブロックの中でも、強豪は長野県勢だ。20対0で敗北を喫した試合もあった。

「攻めることなく、ひたすら守り続けていました」と石塚コーチは振り返る。

ところが翌年、同好会から部に昇格すると、全

心技体を磨いた人間力で 全国上位を目指して

現在は、3年生5人、2年生8人、1年生が3人、これにマネージャー3人を加えて計19人が在籍する。目標は、全国ベスト4。陸上のフジカル（身体的）トレーニング

に加え、氷上では実戦形式のメニューを積み重ね、精神的な強さも増してきた。

ところが、今年は新型コロナウィルスが大きく影響している。強豪ひしめく東北・北海道勢であれば練習試合の相手に困ることはないが、光

泉カトリック高校は滋賀県内に相手

がない。越県を控えている現状で

試合勘を養うのは難しい。

そんな状況下にあっても、11月初

旬に開催されたインターハイのブロ

ック予選で優勝し、長野県で1月21

日から開催される全国大会への出場

を決めた。次は12月19～20日にかけ

ての国体ブロック予選だが、本誌の

発行日（12月25日）にはすでに結果

が出ていているだろう。主将の茶木悠生

（フィジカル）トレーニング

を動くことができます。全国で勝つためには、それができる体力と、状況を判断する力が必要です」と石塚

コーチは話す。こうした体力面・技

術面の礎となるのが、山田監督が重

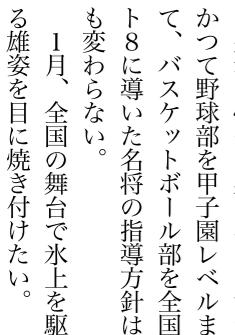
んじる「あいさつ」「物を大切にする心」「仲間の意識を持つ」といつ

た生活習慣から養われる人間力だ。

かつて野球部を甲子園レベルまで育て、バスケットボール部を全国バス

ト8に導いた名将の指導方針は、今も変わらない。

1月、全国の舞台で氷上を駆け回



白熱したゴール前の攻防。シュートで放たれたバックは、トップレベルの選手なら時速140キロまで達するという

校内で呼びかけると生徒10人が集まり、アリーナでジュニアを指導していた石塚史人コーチ（当時大学生）も加わった。北海道出身の石塚コーチは、中学・高校ともに全国大会準優勝を経験している。陸上トレーニングを山田監督を受け持ち、二人三脚の指導が始まった。当時、40歳ですよ」と、山田監督は選手育成の難しさを話す。

アイスホッケーは、重さ8～10キロほどでのプロテクターを身に着ける。限られた視界で氷上を動き、時には全速で走行中に反転し、後ろ向きに滑る。こうした基本動作を習得したうえで、初めて技術や戦術の話ができる。他の競技と大きく異なるのは、リンク内でブレーヤー5人とゴールデンダー（キーパー）1人が競技する中、自由に交代できるという点だ。1チームあたり、最大22人（ブレイヤー20人、ゴールデンナー2人）まで出場ができる。

同好会の設立当初は、県外の強豪相手にまつたく歯が立たなかつた。光

泉カトリック高校が属する北信越・東海・近畿ブロックの中でも、強豪は長野県勢だ。20対0で敗北を喫した試合もあった。

「攻めることなく、ひたすら守り続けていました」と石塚コーチは振り返る。

ところが翌年、同好会から部に昇格すると、全

心技体を磨いた人間力で 全国上位を目指して

現在は、3年生5人、2年生8人、1年生が3人、これにマネージャー3人を加えて計19人が在籍する。目標は、全国ベスト4。陸上のフジカル（身体的）トレーニング

に加え、氷上では実戦形式のメニューを積み重ね、精神的な強さも増してきた。

ところが、今年は新型コロナウィルスが大きく影響している。強豪ひしめく東北・北海道勢であれば練習試合の相手に困ることはないが、光

泉カトリック高校は滋賀県内に相手

がない。越県を控えている現状で

試合勘を養うのは難しい。

そんな状況下にあっても、11月初

旬に開催されたインターハイのブロ

ック予選で優勝し、長野県で1月21

日から開催される全国大会への出場

を決めた。次は12月19～20日にかけ

ての国体ブロック予選だが、本誌の

発行日（12月25日）にはすでに結果

が出ていているだろう。主将の茶木悠生

（フィジカル）トレーニング

を動くことができます。全国で勝つためには、それができる体力と、状況を判断する力が必要です」と石塚

コーチは話す。こうした体力面・技

術面の礎となるのが、山田監督が重

んじる「あいさつ」「物を大切にする心」「仲間の意識を持つ」といつ

た生活習慣から養われる人間力だ。

かつて野球部を甲子園レベルまで育て、バスケットボール部を全国バス

ト8に導いた名将の指導方針は、今も変わらない。

1月、全国の舞台で氷上を駆け回



白熱したゴール前の攻防。シュートで放たれたバックは、トップレベルの選手なら時速140キロまで達するという

校内で呼びかけると生徒10人が集まり、アリーナでジュニアを指導していた石塚史人コーチ（当時大学生）も加わった。北海道出身の石塚コーチは、中学・高校ともに全国大会準優勝を経験している。陸上トレーニングを山田監督を受け持ち、二人三脚の指導が始まった。当時、40歳ですよ」と、山田監督は選手育成の難しさを話す。

アイスホッkeeは、重さ8～10キロほどでのプロテクターを身に着ける。限られた視界で氷上を動き、時には全速で走行中に反転し、後ろ向きに滑る。こうした基本動作を習得したうえで、初めて技術や戦術の話ができる。他の競技と大きく異なるのは、リンク内でブレーヤー5人とゴールデンナー（キーパー）1人が競技する中、自由に交代できるという点だ。1チームあたり、最大22人（ブレイヤー20人、ゴールデンナー2人）まで出場ができる。

同好会の設立当初は、県外の強豪相手にまつたく歯が立たなかつた。光

泉カトリック高校が属する北信越・東海・近畿ブロックの中でも、強豪は長野県勢だ。20対0で敗北を喫した試合もあった。

「攻めることなく、ひたすら守り続けていました」と石塚コーチは振り返る。

ところが翌年、同好会から部に昇格すると、全